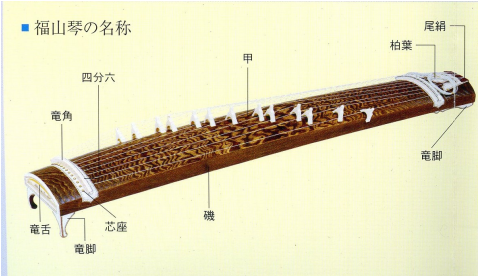
日本一の琴づくり

～こだわりの伝統工芸士　藤田房彦（ふさひこ）～



藤田さんが琴の道に進んだきっかけは中学校卒業後の十五才の時でした。担任の先生のすすめで地元の琴工場に就職したのです。それが、藤田さんにとって琴との初めての出会いでした。

約三年、その琴工場で住み込みをして働きました。最初の仕事はお茶くみとそうじ。毎日、毎日、みんなにお茶を入れたり工場のそうじをしたりと、琴づくりと直接関係のない仕事ばかりをしていました。それでも、正月とぼん以外は休みをとることもなく一生懸命働きました。

二年目になって、藤田さんはやっと琴づくりの仕事がもらえました。「くり」という、琴の台のうらを(1)かんなでけずる仕事です。最初のうちは、藤田さんがけずった台はきれいにはけずれず、仕上げを先輩の職人がしました。なんとか自分で仕上げられるようになろうと、時間をかけてけずりました。しかしそれでも先輩は藤田さんの台に仕上げを入れるのでした。藤田さんはそれを、こぶしをにぎってじっと見ていました。

それから藤田さんは、前よりいっそう一生懸命に「くり」の仕事に取り組みました。朝からばんまで一日も休むことなく、五年間も台と向き合いました。そしてとうとう一人で「くり」を仕上げられるまでになりました。そんな時、藤田さんの仕事ぶりが認められ、岡山県の工場から仕事に来てほしいとさそわれました。藤田さんは、その岡山の工場で、台だけでなく、(2)焼きや(3)飾り付け、(4)げん張りなど様々な仕事をするようになりました。

二十七才になり、すべての工程の技を身につけると、藤田さんの心に一つの強い思いがわいてきました。

「自分一人で琴をつくりたい。」

藤田さんは、自分が思う美しい音色にこだわりたい、と思ったからです。それぞれの工程が高度であるため、今までだれも挑戦しなかった一人での琴づくり。藤田さんは福山へ戻り、自分の工場を建て一人で琴づくりをはじめました。

しかし、その琴づくりは、すべての工程を自分でしなければならないため、とても忙しかったのです。日曜日や祭日も休むことなく、毎日朝七時から夜十時ごろまで黙々と働き続けました。

「よい琴は、昔から鈴の音がすると言われている。そんな音色が出せたら。」

藤田さんはそんな思いをもちながら、台にはどんな木材にすればよいか、いろいろと試しました。納得する美しい音色を探そうと、国内の(5)桐や杉、外国の木材など、様々な木材を使って琴をつくり、音を試していきました。また現地まで直接足を運び、自分の目で質や木目を確かめました。

普通福山琴は、他の琴と違って桐しか使わないためよい音色が出ると評判でしたが、藤田さんはその中でも(6)会津桐が一番よい音色が出ることに気付きました。

「よし。自分の納得する音を出すためには、台は会津桐がいい。値段は高いが、すばらしい音色になる。」

会津桐の値段は、ほかの木材と比べてもとても高いのですが、どんなにお金が苦しい時でも会津桐にこだわり、遠くまで自分の目で選びに行くほどでした。

ある時、お客さんから「この琴は求めていた音が出ない。」と返品されたことがありました。藤田さんはその日、返品された琴をじっと見つめていました。

それからますます藤田さんはひたすら琴づくりにぼっとうしました。藤田さんは、一ミリ単位の微妙な作業「げん張り」で、げんを張っては音を聴き、またげんを張っては音を聴きという作業を何度も何度も繰り返しました。体を心配した奥さんが仕事の時間を減らすよう頼んでも、

「心配ない。わしは作り続けるんじゃ。」

と手を休めることはありませんでした。藤田さんの作る琴の数は通常の人の二倍の量にもなりました。そして、いつの間にか、琴の良しあしを手の感覚だけで判断できるほどのうで前になったのです。

「藤田さんの琴の音色は違う。」

そう言って、遠方から注文に訪れるお客が増えてきました。

藤田さんの奥さんは時々工場をのぞきながら、

「お父さんは本当に琴づくりが好きじゃねえ。」

とつぶやいていました。

藤田さんが五十二才になったとき、琴職人としては日本で初めて(7)伝統工芸士に任命されました。その知らせを聞いた時、藤田さんの胸に熱いものがこみあげてきました。

その数日後、藤田さんを昔からの知り合いが訪ねてきました。話をしている時、その人はふと藤田さんの手を見て言いました。

「藤田さん、わしはあんたのごつごつした手が好きじゃ。あんたの手は職人の手じゃ。その手にわしはほれとるんじゃ。」

藤田さんは、自分の手に目をやりました。自分のごつごつした手。それは長年の作業で厚みをおびた、たくましい手でした。

「納得いくものは、いつまでたってもできんけどなあ。」

そう言ってほほ笑みながら、藤田さんはしばらく自分の手を見つめていました。

「なんでも一つのことをやり続けていくのはいいことじゃ。」

現在六十七才になった藤田さんはおだやかな笑顔で語ります。

そして今でも美しい音色を目指し、こだわりの琴づくりを続けています。

【注】

（1）材木の表面を削ってなめらかにする木工道具。

（2）琴づくりの製造工程の一つで，灼熱に焼いたこてで表面を焼いていくこと。

（3）琴づくりの製造工程の一つ。四分六（しぶろく）・竜角（りゅうかく）・柏葉（かしわば）などの装飾部品や象嵌（ぞうがん）・蒔絵（まきえ）・寄木（よせぎ）等の伝統的装飾技法を用いる。

（4）琴づくりの製造工程の一つ。げんの張り加減で琴の音色が変わる。

（5）日本国内でとれる木材としては最も軽く，湿気を通さず，割れや狂いが少ないという特徴がある。

（6）特徴として，材質が緻密で，適度な硬さと光沢があり，かんなをかけると木肌が銀白色の輝きを放つ。

（7）（財）伝統的工芸品産業振興協会が，経済産業大臣指定の伝統的工芸品の製造に従事している技術者のなかから，高度の技術・技法を保持する人を「伝統工芸士」として認定している。